

自己否定の極致の選択の前に...

今朝の朝日新聞「ひと」欄に、自殺防止と遺族支援を訴えるNPOを立ち上げた元NHK報道局のディレクターが紹介されていた。「いろいろな人がつながりあっていることを実感できれば、自殺はへるはず」の思いから、また、「将来の不安、経済的困窮、偏見に、遺族らは苦しんでいる」ので、その支援のためでもあるよう。

つい先日読んだ「隠された風景(「雑学」バックナンバー - サイト書籍等読後感関係()P 2005.3.21. 『隠された風景 - 死の現場を歩く - 』を読んで」: 参照)」の中でも、自殺した人の遺書についても記者はルポしている。

交通事故で年間死亡者数が1万人を越えると、社会は何とか減らそうとキャンペーンを貼るのに、年間自殺者数がここ数年は3万人台に増えているのに、社会は何の動きもなし。自殺に対しても、やはり「死」に向き合うことは自らの心痛む作業であることから、隠そうとする社会の風潮が背景にあるのだろうか。

ルポした記者によれば、自殺者数の後ろには、多くの自殺未遂者、また、自殺を計り救急車で搬送されて命が助かる数の多いこともルポしている。つまり、如何に夥しい命が自殺に追い込まれているかということであろう。

記者は、多くの遺書をルポしていく内に、殆どの遺書に、身内や関係者へのおわびと、「自分を責める言葉が並んでいる」ことに気づく。実は自殺者は死にたい訳でなく、「助けられたい、どうか救ってもらいたい」と思いながらも、追いつめられ、他の選択肢を選べない自らを責め、そうした自責の念から楽になりたくて「自己否定の極致である自殺」という選択肢を選ぶしかなかったのではないかと考察している。

また、身内の自殺後、少なくない遺族が引っ越している現実もルポしている。つまり、社会の「自殺死」への偏見が多く、遺族はその地域では生きにくいということだろう。

高齢者や難病を患う方の「周りに迷惑をかけるから.....」とか、壮年者の「会社や周りに迷惑をかけた。」というような自殺要因の背景は、周りが「迷惑でないよ。他に選択肢があるかも...、一緒に考えよう」という想いが伝われば、自殺を防げる道はあるような気がする。

「自己否定」しなくて、「いろいろな人がつながりあっていること」を実感できる社会、日々人間関係、地域社会であって欲しいと願う。

記者の記す次の言葉を私も信じたい。

「卑小で非力な存在でもいい。人の助けを借りてもいい。生きられる限り『生きる』と。その声を信じたい。」

(2005年3月22日 記)